

## 2021年度(令和3年度)

### 第3回福山市地域コミュニティ推進懇談会

#### ○開催目的

「福山市地域コミュニティのあり方検討委員会」の報告を踏まえた多様な主体の取組を検証するとともに、各団体が連携、協働して地域コミュニティの再構築に向けた取組を推進するために開催しています。「人口減少時代の地域コミュニティのあり方報告書」で報告された内容について、できることから取り組んでいきます。

#### ○委員（五十音順）

井上 誠	地域づくり塾修了者（御幸学区）
小葉竹 靖	福山市市民局長
佐藤 賢一	福山市自治会連合会会長 ※欠席
杉原 広昭	福山商工会議所青年部運営専務 ※欠席
道城 俊二	福山市PTA連合会幹事
橋本 哲之	福山市社会福祉協議会会長
平岡 顕治	中間支援組織（NPO 法人ひとまちスタジオ理事長）
廣田 要	福山明るいまちづくり協議会会長
藤井 眞弓	福山市女性連絡協議会事務局長
古谷 輝昭	福山市老人クラブ連合会副会長
真室 明美	福山市福祉を高める会連合会副会長
村田 政雄	福山市公衆衛生推進協議会副会長兼事務局長
吉田 美砂	福山市子ども会育成協議会事務局長
寄高 英樹	地域づくり塾修了者（光学区）
座長 渡邊 一成	福山市立大学都市経営学部学部長

#### ○アドバイザー

櫻井 常矢（福山市持続可能な地域コミュニティ形成に関する政策アドバイザー）  
高崎経済大学地域政策学部教授

# 2021年度(令和3年度)第3回福山市地域コミュニティ推進懇談会

## ○日時

2021年(令和3年)11月23日(祝・火)10:00~12:00

## ○会場

福山市役所本庁舎3階 大会議室

## ○次第

テーマ「地域の新たな担い手の発掘」

### 1 事例発表

#### (1)「高島学区での取組事例について」

高島学区まちづくり推進委員会 委員長 藤井省治 さん

#### (2)「福山市女性連絡協議会における会則の変更について」

福山市女性連絡協議会 事務局長 藤井真弓 委員

### 2 ワークショップ・発表

#### (1) 事前説明

#### (2) ワークショップ

#### (3) 発表

- ・講評
- ・全体を通しての質疑
- ・まとめ
- ・事務連絡

## 【懇談会の内容】

### ○事例発表1「高島学区での取組事例について」

「高島学区まちづくり推進委員会(以下、「まち推」という。)」委員長と「田尻の未来を考える会(以下、「考える会」という。)」幹事長をしている。今回はまち推委員長の立場で「高島学区での取組」についてお話したい。町内会長を2回、町内会連合会長を1回して、現在、まち推の委員長をしているが、まちづくりは役員だけの努力では難しいと感じている。そこで、「人づくり」ならと思い、学区のまちづくり事業や考える会の事業で「人づくり」に力を入れている。

人づくりは、まず交流から始まると思っている。まち推事業で



藤井省治さん

〔高島学区まちづくり推進委員会  
委員長〕

は、高島学区少年少女親善球技大会や芸能保存継承事業などは交流のはじめと思う。田尻ばらまつりや夏祭りでは高島学区の人だけでなく外部との交流がある。また、今までにあんずまつりは30回以上開催し、毎年約1万人、菜の花まつりも20回以上開催し、毎年約3千人という人が来られ、地域外の人に田尻の魅力や景観をPRするきっかけとなり、田尻へ移住したいという人も結構おられるほどになった。

高島学区内での交流はもちろん、学区外の人と交流をたくさんしていることが人づくりにつながっている部分も若干あると思っているが、交流だけでまちづくりができるのかというところは個人的に疑問を感じている部分がある。これまで小学生ぐらいから地域と交流を始めて、PTA、青年団、女性会、消防団からまち推、町内会連合会へ、そして老人会へと地域活動に参加していく流れがあったが、今では、老人会と女性会がなくなり、そのような流れが難しくなった。その中でどうやって人づくりをしていくかが一番の問題。

考える会は、景観や名産品など田尻の魅力を子どもたちに伝えて、将来、田尻に帰ってこようと思うように若い人を引き付けようということで、前身となる会が十数年前に発足しやっところまで来た。また、事務局にキーパーソンとなっている人材がおり、人脈と企画力が抜群で、この人も田尻の景観、特に日の出に魅了されて田尻に移住してきた。

考える会では、次のような活動を行っている。

- ・ホームページの開設
- ・田尻のパンフレット作製
- ・地産地消の取組

市内のレストランと田尻の名産物の流通促進のためのシンジケート（共同販売機関）を作り、田尻ブランドを使ったメニューを提供。田尻をPR

- ・ワーケーション（余暇を楽しみながら働く）事業

田尻の魅力を知ってもらうため、事業に積極的に関わり、景観を気に入られた方が移住され、市内で仕事をされている。

会員には、若い人から高齢の人までいるので、それを踏まえて交流をし、人づくりをしていこうと考えて色々な事業や企画をしている。活動の後には田尻の名産品を使った料理を食べながらより親睦を深め、活動に魅力を感じてもらえるようにしている。また、参加したい人はどんな人も受け入れようというスタンスで実施し、県外の大学教授など専門家が参加されるイベントなどもあり、開放的な会となっている。

このように、様々な活動をしている任意団体の「考える会」と「まち推」との関わり方については、まち推の委員長として葛藤はすごくある。考える会をサポートするにあたって、まち推の中でも相談はしているが、現在のまち推の体制では新しい活動をするにはハードルが高いのではと思う。

まち推の委員長の立場としては、考える会などの活動を温かく見守って、連携できる部分は連携していければいいし、何か問題が発生すれば、委員長として対応ができれば良いと思っている。考える会のような交流を通して、若い世代に地域活動の魅力や面白いことをやっていると感じてもらい、同世代の人にも広がって、関心を持ってもらうことでまち推の活動（人づくり）につながっていければ良いと思う。

## ○事例発表2「福山市女性連絡協議会における会則の変更について」

福山市女性連絡協議会のこれまでの経過から話したいと思う。

1946年（昭和21年）：福山市連合婦人会として発足

1970年（昭和45年）：拠点となった会館を草戸町に建設

福山市連合婦人会の事務所のほか結婚式場、貸衣装、貸会場等の経営も行う。

1994年（平成6年）：福山市連合婦人会から福山市女性連絡協議会に改称

2003年（平成15年）：エフピコ RiM に事務所を移転

草戸町の会館を処分し、貸衣装等の事業も全て廃止したと聞いている。

現在：昨年、エフピコ RiM の閉館に伴い、事務所を草戸町の福山市男女共同参画センター内に移転

このように、結婚式場等の事業を実施するくらいすごいパワーを持っていた会で、その当時は相当数会員がいたようだ。市内のほとんどの学区の女性会が、福山市女性連絡協議会に加入しており、加入していないところはないというくらいの状況だったようだ。

しかし、任意団体の弱点といえるかもしれないが、ある時期から、学区女性会の退会の動きが加速して、会員数が大きく減ってしまったようだ。「建設は死闘、破壊は一瞬」という言葉があるが、本当にもろいというのを、私もその後会に入ったが、つくづく感じている。

会員数を増やすために、何度も話し合いをし、退会した学区の知り合いに会って、その後の状況を聞いたり、再び一緒になって活動をする気はないか声をかけたりと動いた。その結果、学区単位での再加入というのは、望ましいことは望ましいが、退会はその学区の一握りの役員の意味で簡単に決められても、再加入には、学区全体の総意が必要となり、なかなかそこまで至ることが不可能であるということが分かり、学区単位の再加入を諦めようという結論に達した。

そこで、出てきたのが、個人単位での加入で、こちらは、個人の意思で加入を決めることができる。また、こちらからも声もかけやすい。学区単位の加入にプラスして、個人の加入を認めようということで、会則を変更することになった。2019年（令和元年）の総会で個人会員の加入も認める会則変更を決議した。

その後個人会員獲得のために、参加しやすく、興味を引くようなテーマの研修などを準備し、参加者を広く募集参加するような動きを始めたが、残念ながら、新型コロナウイルス感染症がまん延し、昨年、大きな会場を準備したが、少人数の会合で終わってしまった。

現在もコロナ禍で、ほとんど動けない状態だが、多少個人会員の加入の動きもあり、コロナ収束後はもっとみんなで頑張っていこうと熱意を持って、お互いに励まし合っているところ。

今後も、会員獲得に向けて、どうすればいいか皆様のアドバイスや情報提供をお願いしたい。



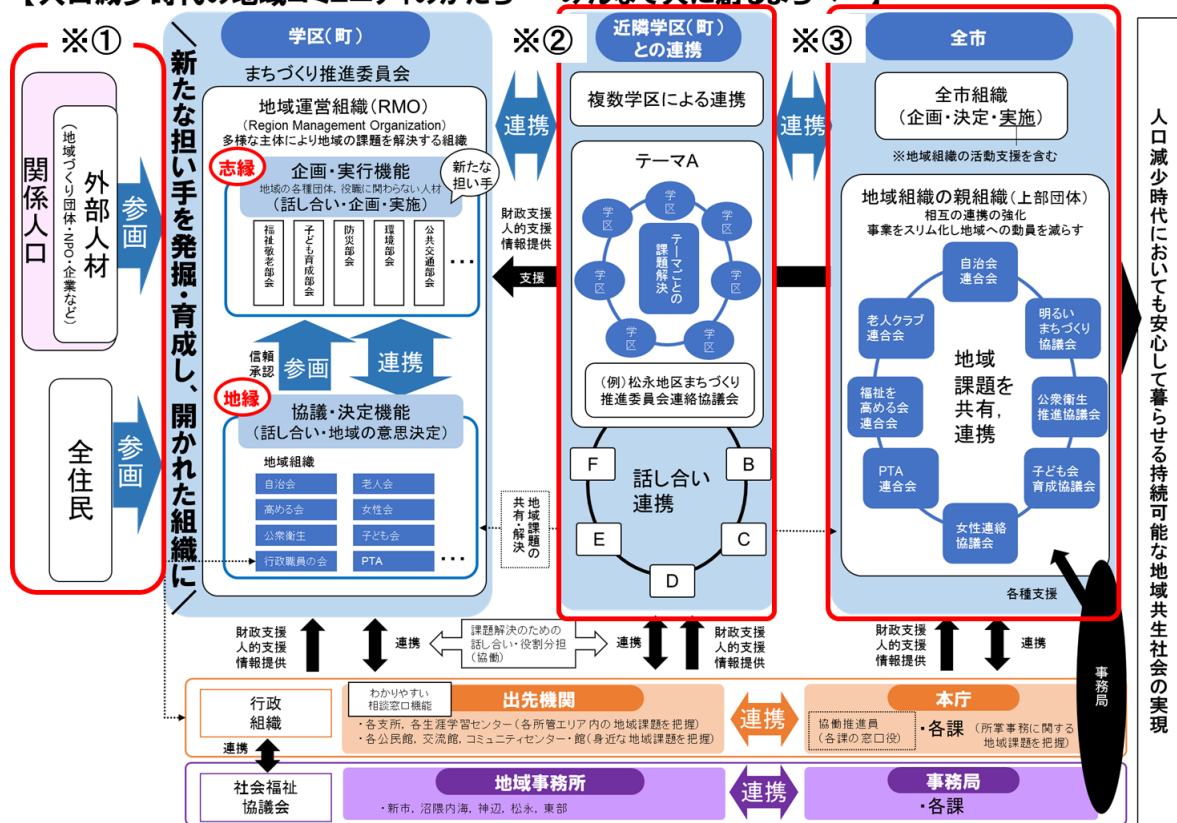
藤井 眞弓 委員

（福山市女性連絡協議会 事務局長）

## 〇みんなで創る， みんなで取り組む地域づくり

～福山市地域コミュニティのあり方検討委員会での報告を踏まえた振り返り～ 渡邊座長

### 【人口減少時代の地域コミュニティのかたち ～みんなで共に創るまちへ～】



出典:「人口減少時代の地域コミュニティのあり方報告書～持続可能な地域共生社会に向けて～」

### 【これまでの地域づくり】

今までの地域づくりは、学区(町)など地域で活動する各民主団体を中心に行われてきた。その中で、「担い手不足」、「役員中心の活動」による「負担感」などの問題が出てきた。

このような問題を打開するためのさまざまな方法の一つとして、「みんなで創る， みんなで取り組む地域づくり」について考えていく。

#### 【関係人口(外部人材)， 全住民の参画】(※①)

現在，中心になって活動している団体，グループに加え，外から「関係人口」や「外部人材」に参画していただいたり，役員だけではなく「全住民」，言い換えれば「いろんな人」に参画していただいて活動を盛り上げたりすることが大事。

#### 【近隣学区(町)との連携】(※②)

では，どのようにして今までの団体以外の人に参画していただくのかというと，「近隣学区(町)との連携」ということでお隣の地域と一緒に何かやってみるといっても，マンパワー不足の解消につながる。

#### 【全市組織の取組】(※③)

地域での取組だけでなく，全市組織としても各組織の主要なメンバーでもある委員の皆様が，事業の見直し，振り返り，再構築などに取り組んだり，地域組織である各学区(町)の団体への依頼の内容を減らしたりと，時代にあった活動に転換していくことが必要。

## ○ワークショップ・発表

テーマ「地域の新たな担い手の発掘」について、各委員が3班に分かれてワークショップ形式で意見交換を行った。

### ○現在の活動を振り返ってみると…？

- ・現在の活動は、今のやり方がいいか悪いか判断することなく、従前どおり実施している。
  - ・みんな魅力を感じない。
  - ・やらないといけない活動は嫌になる、だんだん参加しにくくなる。
- 担い手を探す努力が必要  
→担い手を探すコミュニケーションの機会、場所が必要  
→若い人の意見を聴き、大きくやり方を変えないと団体の存続が難しい。

### ○担い手を発掘するためには？

#### 【手法】

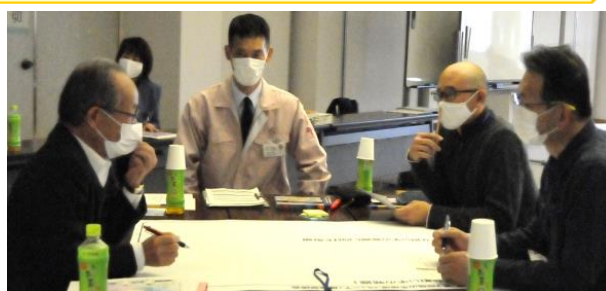
- ・地域活動を1回リセットする。
- ・役職の数を減らし、スマートな会をつくる。
- ・地域活動をやりたい少数派を取り込もう。
- ・ホームページを作成して、事業を多世代にPRする。
- ・次の世代を担う若い人や子どもたちとの交流が大事
- ・コミュニケーションの場を設けてかかわりを持ち、担い手を見つける。

#### 【心構え】

- ・担い手は特別な存在ではない。ハードルを上げてはいけない。
- ・世話する人、誘う人などみんなが役割を持ち、絆が循環するように。
- ・行事の企画段階から参加してもらう。
- ・均一化、マンネリ化した活動を見直し、新しい活動をする。
- ・工夫した活動に取り組み、達成感のある楽しい活動をする。
- ・やりたい活動を楽しく自分たちがやろう。
- ・外部人材を受け入れる意識を持つ。

#### 【外部人材の参画】

- ・地域の団体、企業、専門家などをつなぐ第三者的なコーディネーターが地域には必要
- ・行政が外部人材や専門家を紹介するホームページを作成し、紹介する仕組みを作してほしい。



## 〇講評



櫻井 常矢 アドバイザー  
(高崎経済大学 地域政策学部 教授)

### 【あえて育てる】

今までは、地域活動においても自然とひとが育っていった、次はあのひとがリーダーだという流れがあったが、それが崩れて輪番制になったりしている。例えば企業も「即戦力」を求め、すぐに使える人材を採用するように、日本はひとを育てない社会になってしまった。だから「あえて」育てるという姿勢や仕組みを作ることがとても重要なことである。

ひとは何らかの「手応え」や「変化」を感じたとき、次なる行動や意欲に結びつき、自分もやってみたいなと思い、担い手として育っていく。その意味では、「手応え」や「変化」への実感をどのように作り出していくかがとても大切で、「既存の団体の枠組みややり方に身を合わせろ」と言っても、ひとはついてこないし、それでは育てることにならない。

地域の話し合いのなかで発言したことを実際の活動などに反映させることで、「手応え」や「変化」を実感し、面白そうだなと感じてもらおう丁寧な歩みが必要なのではないか。

### 【まずは問題意識を持つ】

担い手発掘や外部人材の活用には、現在、役員を担っているベテランの皆さんにこそ「大切なことだ」とか、「地域でこのようなことが課題だ」などの目的意識がないと、新たな担い手発掘や外部人材の活用には結びつかない。つまり、まずは当事者であるまちづくり推進委員会やそれぞれの民主団体の皆さんが「このままではダメだ」とか、何かを始めようとするときに「今の人材では足りない」という意識が先に来て、硬くなった土を自ら掘り起こさないと、新たな風をおこす人を招き入れるのはなかなか難しい。現在、地域活動を担うベテランの皆さんがまずは問題意識を持ち、その先で外部人材や新たな担い手とつながるという流れがないと、たとえ見出された外部人材や新たな担い手たちも徐々に行き場を失ってしまい、地域の力にはなかなかならない。

### 【外部人材や新たな担い手のつなぎ役】

具体的な課題にはなるが、地域では、外部人材や新たな担い手と言われても、現在地域活動を担う役員の皆さんは、そもそもどんなひとがいるのかわからないし、分からない。そのため、人材を知っている人がつなぎ役となり、つないでいく方法が求められる。つなぎ役には、各公民館・交流館、各地域振興課やまちづくりサポートセンター、あるいは地域で活動するNPOなどがあげられる。しかし、このつなぎ役が機能していないのが実情。

例えば、他都市では、得意なことを持った人材を公式に認定している自治会や団体などもある。あえて住民の前で認定証を渡して認定することで、普段の役員会には出席していなくても、何か力を借りたい時にはあの人に声をかければいいというのが分かるようになっていく。このように、人材という資源、情報のストックやつなぎ役を機能させることによって新たな人びとの活躍を作り出せる。

一方で仕組みとしてつなぎ役を設けるとなると、行政にお任せとなってしまうかもしれないが、そうした仕組みや制度だけではなく、偶然の「出会い」や「交流」の中でひとが出会い、つながることも当然あり得る。身の周りで開催されるイベントなどの出会いや交流の場が、こうした意味でとても大切な場所だということを地域リーダーは改めて認識しなければならない。

## 〇まとめ



渡邊 一成 座長  
福山市立大学  
都市経営学部 学部長

### 【外部人材の参画は刺激になる】

大学で授業をする中でも、自分自身でも話せる内容だが、あえて毎年外部人材を呼んで講義をしてもらっている。そうすると、受講後の感想文一つとっても、学生の反応が全然違う。そのくらい外部人材と繋がるのは、自分たちにとってもいい刺激となるため、積極的に機会があれば、どんどん外部人材や近隣学区や今まで繋がりがなかった地域内の住民と繋がって、取り組みをしていくのがいいと思う。ワークショップの中でも大学と繋がりたいという話があり、非常にありがたい。私や他の先生方の紹介も出来るのでお声掛けいただきたい。

### 【やり方を変える】

ワークショップの中で「地域活動を一回リセットする」という話があったが、「やることは同じだけどやり方を変えてみませんか」という切り口もあると思う。大学という組織の中で教員は、教授も助教もフラットで同じ立ち位置に立っているのだが、その中で私は、学部長として全体の束ね役をしている。やらないといけないことがある中で、理想とする姿に近づくために何から変えていくかというときに、私は「やり方」を変えている。高校からの講師派遣依頼に対して、チャンスを平等にしたいので、まずは公募制で派遣する教員を決め、もし応募が無かったら一本釣りをするようにしている。このようにするのは、各教員が学部運営に参加している感覚があると思うからだ。

皆さんも重々承知だと思うが、「やり方を変える」ということはすごく大変だが、「変えることをしないと何も変わらない」。だから、「できるところから変える」ことが大事。そういう意味では、やり方を変えるのは一つの方法だと思う。